

# 大分県地方史研究会創立五〇周年にあたって

会長 豊田寛 三二

大分県地方史研究会が創立五〇周年を迎えることとなった。五〇年は、いうまでもなく半世紀である。前会長の故渡辺澄夫先生は、「創立のときは三号雑誌には絶対にしない、という決意で始めた。そして、継続して会誌を発行することが大切である。」と、よく言われていた。そのことを思うとよく続いたものとの感を強くする。これもひとえに会員皆様のご協力や歴代の委員として会のスムーズな運営に携わっていただいたご労苦の賜物と思う。改めて深謝の意を表したい。

私が大分大学に赴任したのが昭和四九年(一九七四)四月であり、以来三〇年余に亘って大分県地方史研究会と関わりをもっていることになる。当初は庶務・会計を担当し、その後は会の庶務全般と近世史研究会のお世話をさせていただいていたが、平成五年以降は勤務先の「公務」におわれ、現在はそのほとんどの仕事を委員の方々にお願している「ヘソ」のような存在となっている。

委員となった年が、きしくも創立三〇周年のときであった。本号に思い出を書いていただいた方々が本格的に会運営等にかわりをもたれたのとはば軌を一にしている。三〇周年から四〇周年にかけては、多くの先輩方がまだ現役であり、小生などは「使い走り」の日々であった。四つの研究会が発足し、毎週土曜日は「地方史」の日であった。また、さまざまな企画を行い、会誌も多くはテーマを定めた特集号であった。当時は、皆本来の職務をもちながら、会誌の原稿集め・編集・発行や研究会活動を行っていたのである。現在の委員の方々も手弁当で粉骨砕身、献身的な努力をいただいているが、今は職務が忙しすぎるのではなからうか。気の毒な思いがするのが実感である。

会員数も最大のときは四五〇名を超える状況であった(もっとも会費未納者も多かったが)。会誌の発送は、学生を動員し

て半日かかりの大仕事であった。しかし、多くの会員の方とはお顔を存じない方とも何か絆みたいなものを感じていたのではなからうか。お目にかかるとすぐに旧知の関係になった思い出がある。

さて、少子高齢化という言葉が流布し始めて随分になる。本会の会員の方々からも「創立以来の会員だが、もう字が読めなくなったので退会したい。」「父は亡くなりました。」などのお知らせを受けることが多くなった。また、現役の多くの方からは「日常の業務が多忙となり、好きな歴史研究はしばらくお預けです。」というお便りもあった。

いま、地方分権という名目のもとに「平成の市町村大合併」が進められようとしている。近世村落であった「大字」や「字」はどうなるのか。それは、単に地名だけではない。そうした組織が果してきた人々の繋がりはどうなるのか。先行き不透明である。

ここで、あらためて提言したい。今こそ「地域」の果してきた歴史的な役割や機能をもう一度歴史的に追及・研究する必要がある。それは、従来の文献や聞き取り、遺跡・遺構・文化財という手法による研究を踏まえながらも、新しい視角の開発も必要である。

五〇年の節目を迎えた大分県地方史研究会の新しい使命・課題は山積している、と思われる。会員の皆様方と、本会のあり方を含めて真剣に議論する必要を痛感する。よろしくお願いしたい。